

# Andrés Bello (1847) の 冠詞の扱いについての疑義\*

土 屋 亮\*\*

## 1. はじめに

本稿は、ベネズエラの文人 Andrés Bello (1781–1865) が 1847 年に発表した *Gramática de la lengua castellana destinada al uso de los americanos* (『アメリカ人<sup>1</sup>の使用のためのカスティーリャ語文法』、以下『カスティーリャ語文法』と呼ぶ) における、彼の冠詞の扱い方について取り上げ、その種々の問題点を指摘することを目的とする。1781 年にベネズエラの首都カラカスに生まれた Bello は、人文学の幅広い領域において多くの業績を残した人物で、一生を通じて文法学・言語学に従事していたわけではないが、彼が残したこの『カスティーリャ語文法』はその後スペイン王立アカデミーの文法観にも影響を与えた、スペイン言語学史上非常に重要な著作である。今日でも多くの学者たちに引用され、その文法観・言語観が研究の対象となっている<sup>2</sup> ことがその証左

\* 本稿は、2013 年 7 月 28 日に関西学院大学梅田キャンパスで開催された、関西スペイン語学研究会第 366 回例会において筆者が行った「冠詞を代名詞類とみなす説についての一考察」という発表の内容の一部に基づいている。なお、当日ご出席くださった先生方にはご高見を承りました。ここに深く感謝いたします。それにもかかわらず、本稿に誤謬があるとすれば、それは全て筆者の責に帰せられるものです。

\*\*福岡大学言語教育研究センター外国語講師

<sup>1</sup> ここでいう「アメリカ人」とは「アメリカ合衆国出身者」を指すのではなく、「南北アメリカ大陸出身者」を意味する。すなわち、Bello の文法書は、「南北アメリカ大陸においてカスティーリャ語 (= スペイン語) を母語とする人々」に向けて書かれたものということになる。なお、メキシコ合衆国は北米に含まれるため、アメリカ大陸のスペイン語圏には「北」も入れておく必要がある。

<sup>2</sup> いま筆者が確認可能なものに限っても、年代の古い順に Isaza Calderón (1967)、Urrutia

である。本稿では、150年以上前の著作でありながら、現代においてもスペイン語文法研究の参照点とされる Bello のこの『カスティーリャ語文法』において、冠詞（主に定冠詞）が品詞論上どのような扱いを受け、どのような機能を持つとされているのかを分析する。その際、Bello がどのような視点を持ち、どのような概念で記述をしているかに注目し、そのいくつかについては疑義を呈したいと思う。なお、本稿において参照する Bello の『カスティーリャ語文法』は、Bello (1984) *Gramática de la lengua castellana*, EDAF, Madrid の版と Fundación Biblioteca Virtual Miguel de Cervantes が提供している原本の pdf ファイル版<sup>3</sup>である。以下、『カスティーリャ語文法』を引用する際は、この両者における該当ページをこの順に記すこととし、本書において節ごとに付されている番号を残し、その箇所の日本語訳は以前筆者自身が訳したものがあれば、その部分を引用する。

## 2. 『カスティーリャ語文法』における品詞分類

ギリシア人は冠詞という語類を知っていたが、ローマ人は知らなかった。ギリシア語には定冠詞があり、ラテン語にはなかったからである。紀元前1世紀ごろのギリシア人文法家ディオニュシウス・トラクスの『テクネーグラマティケー』は冠詞を含む8つの品詞を立てたが、これに従おうとしたプリスキアヌスに代表されるローマの文法家たちは、ラテン語には冠詞とみなされうる語類が存在しなかったため、副詞の下位分類の一つであった間投詞に独立した一つの品詞としての資格を与え、8つという数を踏襲しようとした<sup>4</sup>。この「伝統」はしばらく続いたが、1492年に *Gramática castellana* を著したスペインの

---

(1986)、Obediante and D'Introno (2001)、Gómez Asencio (2009)、Cartagena (2014) など、豊富な研究がある。

<sup>3</sup> pdf 版は以下の URL で入手可能である。

<http://www.cervantesvirtual.com/servlet/SirveObras/04694925499104944157857/index.htm>

<sup>4</sup> Robins (1997: 70-71)

Antonio de Nebrija は当時のカスティーリャ語に 10 の品詞を認め、冠詞を独立の品詞に立てた。ここでは彼の品詞分類には深く立ち入らないが、それからおよそ 350 年後、我々が検討しようとしている Bello は『カスティーリャ語文法』の第 2 章『語の職能に基づく分類』の 34 節において、以下のようにカスティーリャ語の品詞を分類したのであった。

34. Atendiendo ahora a los varios oficios de las palabras en el razonamiento, podemos reducirlas a siete clases, llamadas *Sustantivo, Adjetivo, Verbo, Adverbio, Preposición, Conjunción, Interjección*.

(Capítulo II, Edaf p.41/pdf p.61)

【日本語訳】

34. 今、論理的思考における単語の種々の働きに着目すると、我々はこれを 7 つの類に束ねることができ、それぞれ、実詞、形容詞、動詞、副詞、前置詞、接続詞、間投詞と呼ばれている。 (拙稿 2009a : 106)

一読して直ちに分かるように、本稿で問題にしている「冠詞」は、『カスティーリャ語文法』における最も基本的な品詞の別の中に含まれていない。基本はこのとおりであるが、Bello は第 2 章に対する補遺の中で、もう少し言葉を費やしている。

Yo he reducido las partes de la oración a siete: *Sustantivo, Adjetivo, Verbo, Adverbio, Preposición, Interjección y Conjunción*; pero me ha parecido conveniente dar la denominación común de *Nombres* al sustantivo y al adjetivo, por la semejanza de sus accidentes y la frecuente transformación de uno en otro; sin que por esto, cuando enumero las más altas categorías en que se dividen las palabras, considere al Nombre como

una de ellas, puesto que el Sustantivo y el Adjetivo ofrecen caracteres especiales, exclusivos e importantísimos, que diferencian al uno del otro y de todas las otras clases de palabras. En castellano, y acaso en todas las lenguas, se observa que una parte de la oración se convierte a veces en otra distinta, y mientras dura la transformación deja de ser lo que era, y manifiesta las propiedades de la clase a que accidentalmente pasa. La clasificación de las palabras es propiamente una clasificación de oficios gramaticales.

El sustantivo es la palabra dominante ; todas las otras concurren a explicarlo y determinarlo.

El adjetivo y el verbo son signos de segundo orden ; ambos modifican inmediatamente al sustantivo.

El adverbio es un signo de orden inferior ; modifica modificaciones.

(Capítulo II, Apéndice, Nota I, Edaf p.55/pdf p.369)

### 【日本語訳】

ところで、私は、品詞の数を7つに限定した。すなわち、実詞、形容詞、動詞、副詞、前置詞、間投詞、および接続詞である。ただ、実詞と形容詞に対しては、両者の屈折の変化が類似していることと、頻繁に一方から他方へ転換することから、一般に用いられる「名詞」という名を与えるほうが好都合だと私には思われた[ので、そのようにした]。とはいえ、このことによって、全ての単語が分類される最も位の高い範疇[つまり上記の品詞]を私が数え上げる際に、この「名詞」を、その範疇の中に含めるようなことはしていない。なぜなら、実詞と形容詞は、非常に重要で際立った、これら二つの語類にしかない特徴を持ち、それゆえ一方を他方から区別し、かつ、他のすべての語類からこれらを区別するからである。カステイーリャ語においては、そして、おそらく全ての言語においては、ある一つの品詞

が他の品詞に転換する場合がままあり、その転換が持続している間は、かつての品詞であることをやめ、偶然転換することとなった語類の特徴を呈する。単語の分類とは、本来、文法上の働きの分類である。

実詞は、つねに上に立つ語である。つまり、他の全ての語は、これを説明し限定するために、これに関与するのである。

形容詞と動詞は、二番目の位の語である。どちらも実詞をじかに修飾する。

副詞はそれよりさらに下位の語である。[他の語による]修飾を修飾する。

(拙稿 2010a : 153 - 154)

このように Bello は、品詞には数え入れないものの、実詞と形容詞の上位概念として「名詞」を想定している。それは、ラテン語から受け継いでいる両品詞の形態上の相似性と、相互に転換が可能であるという事実に基づく。だが、これら二つの語種は、機能上明らかに相違するので、品詞として独立させておく必要があるということである。この考え方は、引用した部分の最後の 4 行に現れており、Bello は実詞には文法上の機能として第一位の位を与え、形容詞と動詞を第二位としている。これが根本的な分類であるならば、「冠詞」の入るべき場所はおのずと決まる。冠詞を含む限定詞類は、上に引用した拙稿 (2010a) の実詞の説明に見られる「他の全ての語」に含まれ、実詞を「説明」あるいは「限定」する<sup>5</sup>。つまり、限定詞は第二位の語類である。そして、これが動詞でないことは自明であるから、Bello に従えば限定詞は形容詞ということになる。スペイン語では、限定詞は実詞と文法上の性と数において形態上の一致を見せることから、純然たる統語的機能という観点から見れば、この見方は当を得ている。ただ、冠詞についての説明はこれだけではない。次節ではもう少し

<sup>5</sup> この箇所では、形容詞の機能が「説明 explicar」であるのか「限定 determinar」であるのかは不明である。

詳しく Bello の考え方を見ていくことにしよう。

### 3. 冠詞と指示詞

Bello の『カスティーリャ語文法』には、冠詞の説明のために割かれた章がある。本節ではこれを中心に検討する。なお、これまで「冠詞（スペイン語では artículo）」という言い方を繰り返してきたが、この語は少なくともロマンス語学においては近年まで「定冠詞」を指すのがもっぱらであり、Bello も「定冠詞」の意味で artículo と言っている場合があるので注意を要する。

さて、Bello は『カスティーリャ語文法』の第 14 章「定冠詞」の 266 節で、これについて以下のように述べている。

266. Comparemos estas dos expresiones, *aquella casa que vimos*, *esta casa que vemos*. Si ponemos *la* en lugar de *aquella* y de *esta*, no haremos otra diferencia en el sentido que la que proviene de faltar la indicación accesoria de distancia o de cercanía, que son propias de los pronombres *aquel* y *este*. El *la* es por consiguiente un demostrativo como *aquella* y *esta*, pero que demuestra o señala de un modo más vago, no expresando mayor o menor distancia. Este demostrativo, llamado *artículo definido*, es adjetivo, y tiene diferentes terminaciones para los varios géneros y números: *el campo*, *la casa*, *los campos*, *las casas*.

(Capítulo XIV, Edaf p.102/pdf p.110)

Bello は、*aquella casa que vimos* と *esta casa que vemos* における指示詞 *aquella* と *esta* を、定冠詞の *la* に置き換えた際に生じうる意味の相違から定冠詞の機能について説明を試みている。*aquella* と *esta* の意味に「遠近」の差異があるのは、関係節内の動詞の時制 *vimos*（直説法不定過去）と *vemos*（直説法現在）

と関連付けることもできる<sup>6</sup>が、これを *la casa que vimos/vemos* としたところで、この「遠近」の意味を欠いているという点を除けば、元の語列と意味論的な違いがないというのが Bello の論理である。そして、それがゆえに、定冠詞は指示詞であり、「遠近」は表さないものの、より緩やかな形で指示をするのだという。また、これが冠する実詞の性と数に合わせて語形が変化するところから、これは形容詞であるという。このことは、先に引用した「形容詞と動詞は第二番の位の語」という前提からも導かれる帰結であって矛盾はしない。さて、この定冠詞と指示詞の関係性についてももう少し Bello に語ってもらおう。

273. Los demostrativos *este, ese, aquel*, se sustantivan como los otros adjetivos, y eso mismo sucede con el artículo, que toma entonces las formas *él* (con acento), *ella, ellos, ellas* (aunque no siempre, como luego veremos): «El criado que me recomendaste no se porta bien; no tengo confianza en *él*» *él* es *el criado que me recomendaste*; «La casa es cómoda; pago seiscientos pesos de alquiler por *ella*»: *ella* es *la casa*; «Los árboles están floridos; uno de *ellos* ha sido derribado por el viento»: *ellos* reproduce *los árboles*; «Las señoras acaban de llegar; viene un caballero con *ellas*»: *ellas* se refiere a *las señoras*. Hemos visto (cap. IX) que la estructura material de varios nombres se abrevia en situaciones particulares: parece, pues, natural que miremos las formas *el, la, los, las*, como abreviaciones de *él, ella, ellos, ellas*, y estas últimas como las formas primitivas del artículo\*\*. Sin embargo, a las formas abreviadas es a las que se da con más propiedad el título de artículos.

\*\*Destutt de Tracy reconoce la identidad del artículo *le* y el

<sup>6</sup> 厳密に指示詞のみを比較するなら、動詞の時制を変えずに、*aquella casa que vemos / esta casa que vemos* というふうに最小対にするのが望ましいであろう。

pronombre *il* en francés. ¿Cómo es que en castellano, donde salta a los ojos la de *él* y *el*, tienen algunos dificultad en aceptarla?

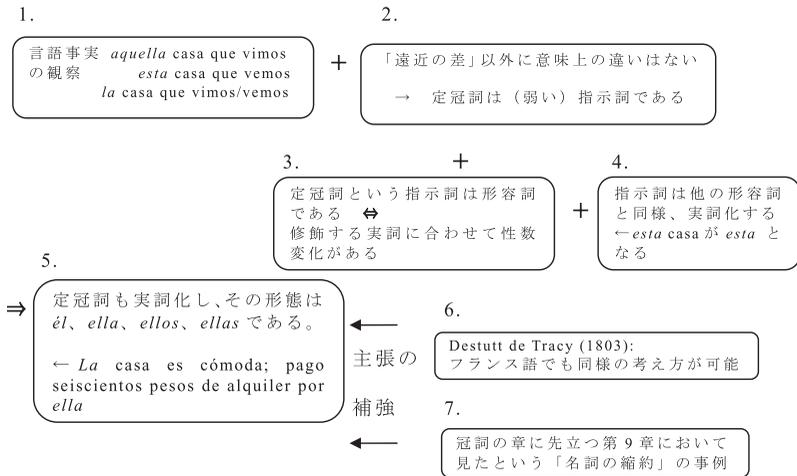
(Capítulo XIV, Edaf p.104/pdf p.111)

この273節は言うなれば Bello の「冠詞観」とでもいうべきものの核心である。先に見た266節によれば、定冠詞は指示詞であり、これは形容詞である。そして、*este*、*ese*、*aquel* といった指示詞は他の形容詞と同じように実詞化する。したがって、定冠詞も同様に実詞化する。その実詞化した形態が *él*、*ella*、*ellos*、*ellas* である。これらは3人称の主格および前置詞格の人称代名詞である。Bello がこれを導くための根拠として提示した例文を見よう。まず、*El criado que me recomendaste no se porta bien ; no tengo confianza en él* (「君が私に推薦してくれた使用人はふるまいがよくないね。彼を信用することはできないよ」)における *él* は、先に言及されている *el criado que me recomendaste* を指すという。つまり、*el criado* が *él* によって置換されている。また、*La casa es cómoda ; pago seiscientos pesos de alquiler por ella* (「家は快適です。そのために600ペソの家賃を払っているのです」) という文においては、*ella* は *la casa* を指す。つまり、*la casa* が *ella* によって置換されるというわけである。残る2つの例文においても性と数が異なるだけで、同様である。そして、Bello の「冠詞観」の根幹は、定冠詞の *el*、*la*、*los*、*las* をそれぞれ *él*、*ella*、*ellos*、*ellas* の縮約形とみなし、前者を従来の慣習どおり「定冠詞」と呼ぶのが相応しいというものである。この考え方は、『カスティーリャ語文法』第9章で見たという「名詞の縮約」という観点からも自然であり、また、フランスの哲学者 Destutt de Tracy<sup>7</sup> もフランス語において定冠詞の *le* と人称代名詞の *il* を同

<sup>7</sup> (Antoine) Destutt de Tracy (1754–1836) は、フランス語において *idéologie* という語を初めて用いた哲学者(寺澤1999: ideologyの項)であって、1803年に刊行されたという彼の「観念学原理、第二部、文法」(*Éléments [Éléments] d'idéologie, Seconde partie, Grammaire*) はスペインの思想にも大きな影響を与えたという(西川1988: 136–137)。

一視している<sup>8</sup>ことを挙げて、同様の発想がカスティーリャ語においても成り立つことを主張している。

ここで、第9章の内容については次節で検討することにして、ひとまずこの段階における、Belloの主張の論理関係を、主張の支えとなる論点に番号を振って、図式的に整理しておこう。



【図1 Belloの主張の論理関係】

先の引用で示したBelloの「冠詞観」の骨子はこのようにまとめられ、整理できよう。1.から4.までの考察から5.という結論を導き、これを6.と7.で補強するという形になっている。ところで、先にふれたとおり、Belloが自らの主張において援用している7.の「名詞の縮約」は、彼の『カスティーリャ語

<sup>8</sup> これを主張する彼の言を直接引いておこう。N'oubliez pas que *le* et *il*, le pronom et l'article, sont la même chose; c'est le même adjectif déterminatif. L'homme, c'est *le homme*; c'est l'idée *homme* exprimée et déterminée dans son extension. *Il*, c'est la même idée *homme*, non exprimée, mais sous-entendue, et déterminée de même. (Comte de Tracy, Destutt (1803) *Éléments d'idéologie*, Seconde partie -Grammaire-, Deuxième édition, Courcier, Paris, 1817 [Réimpression: De Tracy, Destutt, *Éléments d'idéologie*, II -Grammaire-, Vrin, Paris, 1970], p. 139)

文法』の第9章で論じられており、上の引用内でふれられているが、本稿ではまだその内容を確認していない。次節ではこれを検討し、Belloの主張の流れを追う。

#### 4. 『カステイーリャ語文法』「第9章 名詞の縮約」

この第9章は我々が拠っている版では、3ページ足らずの短い章であるが、スペイン語による原題は *Apócope de los nombres* であり、筆者が「縮約」と訳出した *apócope* は、語尾の脱落を意味する語である。さっそくその内容を検討しよう。

この第9章は我々にとってはやや意外な例から始まる。神の名 *Jesús* が *Cristo* によって後続される場合に *Jesucristo* (イエス・キリスト) となり、二語が一語になったうえで縮約が起きているという (Capítulo IX, §151)。Bello は縮約が起きているとしか述べていないが、具体的には *Jesús* の語末の *-s* が脱落しているということであろう。この他に、人名の姓を取り上げ、「Gonzalo の子」を表す *González* (ゴンサレス) や「Álvaro の子」の意味の *Álvarez* (アルバレス) といった語を、縮約の例として挙げている (Capítulo IX, §152)。ここで Bello が言っているのは、接尾語である *-ez* が接合される際に、元の名の語末の母音が脱落するということであろう。

さて、我々にとって肝要な、形容詞の実詞化の問題である。Bello は 153 節において次の5つの種類の形容詞が縮約を起こすとしている。その第一種は不定の限定詞 *uno*、*alguno*、*ninguno*、第二はそれぞれ「良い」と「悪い」を意味する品質形容詞 *bueno* と *malo*、第三は序数の *primero*、*tercero*、*postrero*、第四は「大きい」を表す品質形容詞 *grande*、第五は「聖なる」を意味する *santo* である (Capítulo IX, §153)。これらの形容詞が縮約を起こした場合、形態は前から順番にそれぞれ *un*、*algún*、*ningún*、*buen*、*mal*、*primer*、*tercer*、*postrer*、*gran*、*san* となる。さて、次に 154 節を下に引用しよう。

154. La apócope de estos adjetivos no tiene cabida sino en el número singular, y precediendo el adjetivo apocopado al sustantivo; por lo que debe precisamente usarse la forma íntegra en frases como éstas: *hombre alguno, el primero de julio, el capítulo tercero; entre los salones de palacio no hay ninguno que no esté ruinoso*. Dirase, pues: *un célebre poeta, un poeta de los más famosos, y uno de los más famosos poetas*.

(Capítulo IX, Edaf p.75/pdf p.85)

ここに引用した 154 節では、縮約の発生条件が説明されている。まず、単数形でのみ起こるということ、そして、上に列挙された形容詞が実詞に先行することが条件である。したがって、形容詞が実詞に後続する場合 (*hombre alguno, el capítulo tercero*)、あるいは実詞以外の他の要素に先行する場合 (*el primero de julio, ...no hay ninguno que no esté ruinoso*) は縮約が起きない。ただし、*uno* の場合は例外である。*un célebre poeta* (著名な詩人) という場合、*célebre* は形容詞であるので、*uno* の現れている位置は実詞 *poeta* の直前ではないが縮約が起きている。ここに登場している形容詞以外のものについては、これに続く 155 節で取り上げられている。

155. *Buen, mal, gran, san*, deben preceder inmediatamente al sustantivo: *buen caballero, mal pago, gran fiesta, San Antonio, el apóstol San Pedro*. No podría decirse: *mal, inicuo, inexcusable proceder; gran opíparo banquete*. Los demás adjetivos susceptibles de apócope consienten otro adjetivo en medio: *algún desagradable contratiempo, el primer infausto acontecimiento*. Pero cuando al adjetivo se sigue una conjunción, nunca tiene cabida la apócope: *el primero y más importante capítulo*.

(Capítulo IX, Edaf p.75/pdf p.86)

この引用のとおり、縮約形の *buen*、*mal*、*gran*、*san* は実詞の直前に来なければならず (*buen caballero*、*mal pago*、*gran fiesta*、*San Antonio*)、他の形容詞が介在する場合には、完全形を用いる必要がある。一方で、先ほど見た *uno* もそうだが、*alguno* と *primero* は他の形容詞の介在があっても縮約が起こる (*algún desagradable contratiempo*、*el primer infausto acontecimiento*) が、接続詞が後続する場合は、やはり縮約は起こらない (*el primero y más importante capítulo*)<sup>9</sup> という。さて、ここまで性のことが語られていないが、それについては続く 156 節において、“Los adjetivos arriba dichos, excepto *primero*, *postrero*, *grande*, no consienten la apócope en el género femenino...(Capítulo IX, Edaf p.75/pdf p.86)” と述べられている。すなわち、先に挙げた形容詞のうちでは、*primero*、*postrero*、*grande* を除き、女性形では縮約が起こらないという<sup>10</sup>。

さて、この第 9 章における主要な点は以上のとおりである。では、これまでに見た縮約についての Bello の見解と前節で流れを追った議論は、どのように関連付けられるであろうか。Bello が最初に挙げている固有名詞の件は脇に置き、形容詞の縮約の問題、しかも我々が関心を抱いている限定詞の事例のみを取り上げよう。

先に引用した Bello のことばのとおり、形容詞 *uno*、*alguno*、*ninguno* は、男性単数の実詞の前に置かれる際 *un*、*algún*、*ningún* という縮約された形態をとる。このことは、裏を返せば、次のように言うのと同じである。つまり、男性単数以外の素性 (男性複数、女性単数、女性複数) を持つ実詞に冠する場合

---

<sup>9</sup> Bello はこのように述べているが、*primero* のような縮約を起こす序数と他の形容詞が並列する場合、現代のスペイン語では、この縮約は選択的である (RAE y ASALE 2005: 523)。すなわち、Bello が挙げている例でいえば、*el primer y más importante capítulo* ということも可能である。

<sup>10</sup> *grande* は確かに女性実詞の前でも縮約が起こるが、序数の *primero*、*tercero*、*postrero* に関しては、現代スペイン語では男性実詞の前でのみ縮約が起こるとされている (RAE y ASALE 2011: 123)。Bello 自身も次の 156 節でこれら序数の女性形における縮約は稀だとしているが、この点についてはこれ以上立ち入らない。

には縮約は起こらないということと、そもそも実詞に付加せずに単独で用いられる用法があるということである。Bello は実詞に冠しない用法について特別な注意をここでは払っていないが、前節の引用文で見たように、形容詞の実詞化を論じた箇所でのこの第9章の内容を引き合いに出しているところから、*uno*、*alguno*、*ninguno* といった形容詞が実詞に冠しない場合、それら自体が実詞になると考えていると推察できる。先に引用した彼自身の例 *uno de los más famosos poetas* の *uno* がこれに該当する。この *uno* という語は、英語で言えば、不定冠詞の *a* および数詞の *one* に当たる。後者がたびたび代名詞として使われることを思い起こせば、この *a* と *one* の関係をスペイン語の *uno* に見ようとするのは無理なことではない。なお、先に「実詞に冠しない」と言ったが、これに後続する場合はむしろ形容詞のままである (*hombre alguno* [先の154節]) のだが、*uno* が実詞の後ろに置かれることはない (*\*libro uno*)。形容詞 *uno* を例にとると、このことを以下のように示すことができる (下の用例の *Cómprate* は「買いなさい」の意)。

性数の別	形容詞としての用法	実詞としての用法
男性単数	[Cómprate] <i>un libro</i>	[Cómprate] <i>uno</i>
女性単数	[Cómprate] <i>una manzana</i>	[Cómprate] <i>una</i>
男性複数	[Cómprate] <i>unos libros</i>	[Cómprate] <i>unos</i>
女性複数	[Cómprate] <i>unas manzanas</i>	[Cómprate] <i>unas</i>

この表で明らかのように、男性単数形以外は同一の形態で両用法に充当される。これは *alguno* と *ninguno* でも同様である。

さて、問題は、Bello が第9章において開陳したとみなすことのできるこの考え方を、他の形容詞全般、そしてとりわけ、定冠詞と主格人称代名詞の3人称の形態の関係にあてはめることができるかどうかということである。次節ではこの問題について論じる。

## 5. 広義の「形容詞」とその実詞化の問題について

本稿の第3節において、Belloが「冠詞は指示詞であり、指示詞は形容詞である。そして、形容詞は実詞化する」と述べているのを確認した。そして、『カスティーリャ語文法』第9章でふれたように、形容詞の場合は縮約形、実詞の場合は完全形を取る語もある（例えば前節で見た *un* と *uno*）。ゆえに、この関係を、定冠詞と3人称の主格人称代名詞の間にも見るのが自然である」というのが、彼の主張の流れである。しかし、この主張はどこまで妥当であろうか。本節では形容詞の実詞化に関する彼の主張の問題点を取り上げ、その妥当性に疑義を呈する。

### 5.1. 「形容詞」という語について

第2節で見たように、Belloは『カスティーリャ語文法』の中で、カスティーリャ語（スペイン語）の品詞の数を抑制気味に設定している。品詞の数を少なくすれば、おのずと多様な語種が一つの品詞に含まれる。我々がこれから問題にしようとしている「形容詞」という語も例外ではなく、Belloによれば、第一位の要素である実詞を直接修飾するのが、第二位の要素である形容詞と動詞の働きである。したがって、先の5ページでも述べたように、実詞を修飾するあらゆる語種が形容詞であり、それには定冠詞も含まれる。そして、そのことは、形容詞が修飾する実詞の文法上の性と数に合わせて形態を変えるという統語上の事実によって担保されている。Belloに従うと、以下の下線部の語はいずれも形容詞である。

muchos libros / este coche / mi novia / una chica rica / un hombre  
el profesor / la casa / unas ratas / el primer piso

ここに挙げたのは、定冠詞、不定冠詞、数量詞、所有形容詞、指示形容詞、序

数詞、品質形容詞といった多種多様な語種であるが、修飾する実詞の性と数に合わせて形態を変えるという、純然たる統語的な観点からは確かにいずれも形容詞であると言ってよい。Bello はそのように考えているからこそ、品詞の数を少なくできたのである。しかしながら、ここには、実詞の指示対象の外延と内包を規定する語種が混在している上、それらが実詞化する際の統語上の方策もそれぞれ異なる。先に指示形容詞を取り上げているので、*este coche* (この車) を例にとると、*este coche* における *este* は *coche* を限定し、性と数において形態を一致させている。したがって、この場合は形容詞であるが、これが単に *este* (これ) となるとこの語自身が実詞としての扱いを受けるため、これによって実詞化すると言えよう。このように、上記の例の語群には、後続する要素を省略するだけで、実詞化可能な語種がある。それらを以下にまとめよう。

「形容詞」を含む実詞句

muchos libros (たくさんの本)

este coche (この車)

una chica rica (一人の裕福な女)

unas ratas (数匹のネズミ)

実詞化後の形態 (代名詞)

muchos (たくさん)

este (これ)

una (一人の女)

una rica (裕福な女一人)<sup>11</sup>

unas (数匹)

上に示したように、多くの数量詞と不定冠詞、指示形容詞は単独で実詞として用いることも可能だが、13 ページの表で確認したように不定冠詞の男性単数形はそのままでは実詞として用いることはできないし、それは所有形容詞や序数詞についても同様である。すなわち、

<sup>11</sup> このように不定冠詞を含む数量詞と、いわゆる通常の意味の「形容詞」が共起する場合、数だけを問題にするなら、*una* (一人の女性) だけで実詞化可能だが、その属性が問題になっている場合には *una rica* (一人の裕福な女性) とすることも可能である。

<u>un</u> hombre (一人の男)	*un (一人)
<u>mi</u> novia (私の[女の]恋人)	*mi (私の)
el <u>primer</u> piso (初めの階、一階)	*el primer (初めの)

とは言えず、以下のように言わなければならない。

<u>un</u> hombre (一人の男)	uno (一人)
<u>mi</u> novia (私の[女の]恋人)	la mía (私の[恋人])
el <u>primer</u> piso (初めの階、一階)	el primero (初めの[階])

ここで問題となるのは、*muchos* や *este*、*unas* が同形のまま形容詞から実詞に変移するのに対し、*un* や *primer* はそうではない、ということではない。同形であろうとなかろうと、かたや形容詞、かたや実詞（代名詞）としてパラダイムが存立していれば問題はない。問題なのは、*muchos* や *este* などが単独でその実詞性を発現しているのに対し、*mía* や *primero* は単独で実詞としての機能を果たすことができず、さらに何らかの限定詞が必要となることである。そして、その際、句としての実詞性はどこに内在するのかということが問われることになる。なぜなら、Bello に従えば、*la mía* という語列は「形容詞+形容詞」という句になるからである。このことは註 11 で補足し、上でふれた *una rica* についても同様である。形容詞である *rica* は単独では実詞の機能を果たせず<sup>12</sup>、何らかの限定詞を必要とする。したがって、単独で実詞になりうる形容詞と、そうではない形容詞があるという事実がある。Bello はこれらを単一の「形容詞」という語種に落とし込み、その非対称性を等閑に付した上で、この関係を定冠詞と 3 人称の主格人称代名詞との間に見ようとしていることにな

---

<sup>12</sup> 複数形では単独で実詞となりうる。

る。我々はこの Bello の視点を問題視し、次の項で、彼が設定しようとした定冠詞と 3 人称の主格人称代名詞との関係を検討する。

## 5.2. 定冠詞と 3 人称の主格人称代名詞

第三節で見たように、Bello は現代スペイン語の定冠詞と 3 人称の主格人称代名詞の関係を、形容詞とその実詞形という枠組みで理解しようとする。ここで、現代スペイン語における定冠詞と人称代名詞のパラダイムを確認しておく。

定冠詞 (男性と女性)

	単 数	複 数
男性	<b>el</b> (el libro “the book”)	<b>los</b> (los libros “the books”)
女性	<b>la</b> (la casa “the house”) 一部の語で el (el agua “the water”)	<b>las</b> (las casas “the houses”)

主格人称代名詞 (3 人称)<sup>13</sup>

	単数	複数
男性	<b>él</b>	<b>ellos</b>
女性	<b>ella</b>	<b>ellas</b>

上記の表を一瞥して分かるように、定冠詞と 3 人称の主格人称代名詞は形態が極めて似ている。それはいずれもラテン語の指示詞から派生した結果成立しているので当然ではある。しかしながら、そうであるからといって、Bello の言うように、この両者が同じカテゴリーに属する語の、形容詞としての実現形

<sup>13</sup> 通例主格人称代名詞の 3 人称には、*usted* とその複数形 *ustedes* を含めるのがもっぱらであるが、これは話し手から見た対話者を指す非親称形である。フランス語の *vous* やイタリア語の *Lei* に相当すると考えてよいが、元来 *vuestra merced* (あなた様の恩寵) という名詞句が音声変化を被ってできた形式であるので、3 人称となっている。また、主格人称代名詞の 3 人称の形態はいずれも前置詞の項としても用いられる。

および実詞としての実現形であると断ずることは困難である。ここで再び、Bello が挙げていた例を引用しよう。ここで初めて例文番号を付す。なお、下線部は定冠詞を含む実詞句、そして、イタリック体になっているのは3人称の主格人称代名詞である。

- (1) El criado que me recomendaste no se porta bien; no tengo confianza en *él*.

「君が私に推薦してくれた使用人はふるまいがよくないね。彼を信用することはできないよ」

- (2) La casa es cómoda; pago seiscientos pesos de alquiler por *ella*.

「家は快適です。そのために 600 ペソの家賃を払っているのです」

- (3) Los árboles están floridos; uno de *ellos* ha sido derribado por el viento.

「木々が花を咲かせていますが、そのうちの一本は風で倒されてしまいました」

- (4) Las señoras acaban de llegar; viene un caballero con *ellas*.

「婦人たちは到着したばかりですが、一人の紳士がその婦人たちと来ています」

(1)における *el criado* の *el* は定冠詞であり、定冠詞は形容詞であるので、後続する男性単数実詞 *criado* を修飾している。そして、第3節で述べたように、*él* が文の後半でそれと同一の指示対象を指示する。いわば、*el criado* が *él* によって置換されている。また、同様のことが(2)、(3)、(4)についても言える。Bello はこの点を重視し、定冠詞と3人称の主格人称代名詞を関連付け、前者を形容詞形（縮約形）、後者を実詞形（完全形）とみなしたわけである。だが、我々はこの点を疑う。

さて、この四つの例文には互いに共通点と相違点がある。共通点は、いずれの文も主格人称代名詞が前置詞の項となっている点である。それぞれ(1)から順に、前置詞 *en*、*por*、*de*、*con* によって支配されている。一方、相違点としては、(1)と(4)における下線部の実詞句は有生の指示対象(「使用人」と「婦人たち」)を有するが、(2)と(3)に関しては無生(「家」と「木々」)である。以下、この2点について順に論じ、我々が Bello の考えを疑う理由を示す。

まず、(1)から(4)までの主格人称代名詞が前置詞の項になっている点だが、これは四つの例文のうち、特に(2)と(3)においてそうでなければならない理由がある。スペイン語の主格人称代名詞には、それが前置詞の項となっていない場合、有生の指示対象を指示しなくてはならないという意味論上の制約がある。つまり、(2)における *ella* という語は「一人の人間の女」を意味し、(3)の *ellos* は「最低一人の男を含む複数の人間」を意味する。しかし、これが前置詞の項となると、その制約が緩和され、無生の「モノ」も指示可能となる。ただし、文法上の性と数は一致していなければならない。この制約について Butt and Benjamin (2011) も次のように述べている。

*Él/ella/ellos/ellas* may translate ‘it’ or ‘them’, when applied to non-living things, especially after prepositions: *no fuera de la casa sino dentro de ella* ‘not outside the house but in it’. But they are taken to stand for human beings when they are used as the subject of a verb. One does not express *el viento sopla* ‘the wind’s blowing’ as *\*él sopla*, which means ‘he’s blowing’ (*sopla* = ‘it’s blowing’), and one cannot say *\*compré una mesa y un sillón. Él tiene tapizado de cuero y ella es de diseño italiano* for *el sillón tiene... y la mesa es de...* ‘I bought a table and an armchair. The chair is leather-covered and the table is of Italian design’.

(Butt and Benjamin 2011 : 132 – 133)

この意味上の制約は、フランス語と比較するとその特徴が浮き彫りになる。フランス語においては有生性に関する制約はなく、あくまで文法上の性と数という文法範疇上の制約があるのみである。朝倉ほか（1996）で簡単に確認しておく。

[引用者註：人称代名詞の] 1、2 人称形はいうまでもなく「人」を示すが、3 人称形は「もの」をも受けることができる：

Ce tableau est beau.	→	<i>Il</i> est beau.
「この絵は美しい」		「それは美しい」
Cette voiture est neuve.	→	<i>Elle</i> est neuve.
「この車は新しい」		「それは新しい」

（朝倉ほか 1996：75）

我々も文学作品から例を引いておこう。なお、下線と斜字体は本稿筆者による。

(5) Le soleil était monté un peu plus dans le ciel: *il* commençait à chauffer mes pieds. (Albert Camus, *L'étranger*, p. 17)

「太陽はいよいよ上り、私の足もとをあたためだしていた」

（窪田啓作訳『異邦人』新潮文庫）

(5)の文においては、スペイン語の *él* にあたるフランス語の *il* が男性単数実詞の *le soleil*（太陽）を指示しているが、これと同様のことはスペイン語ではできない。さて、先の例文に戻ると、スペイン語においては、3 人称の主格人称代名詞はもっぱら「人」を指示するため、無生の事物が主語となる(2)と(3)の例文では、対応する主格人称代名詞は前置詞の項でなければならなかった。先に引用した Butt and Benjamin (2011) が言うように、主格人称代名詞

が単独で主語として用いられる場合には、事物を指示することができない。Bello が提案する、定冠詞と 3 人称の主格人称代名詞との関係の問題点の一つは、この有生性に関する制約である。

そして二つ目の問題は、統語上の問題である。(2)と(3)とは異なり、(1)と(4)の主語は有生である。つまり、「人」を指示する。そうであるなら、(1)と(4)の主格人称代名詞は何の問題もなく、主語を指示することが可能である。しかし、それにもかかわらず、この二つの文は、主格人称代名詞がやはり前置詞の項として現れる用例となっている。なぜ最もシンプルな、主格人称代名詞を主語として用いる用例ではないのであろうか。たとえば、(1)の文の後半部を、*no hace más que buscar a la cocinera* (「彼は料理女を追いかけてばかりいる」) とすると、自然な文としては、下の(6)のようになるだろう。

(6) El criado que me recomendaste no se porta bien; (<sup>?</sup> él) no hace más que buscar a la cocinera.

「君が私に推薦してくれた使用人はふるまいがよくないね。彼は料理女を追いかけてばかりいるよ」

つまり、後半部の主語を前半部の主語(下線部)と同一指示の内容に書き換えると、後半部の主格人称代名詞を省略するほうが自然である。先に引用した Butt and Benjamin (2011) は、スペイン語における主格人称代名詞の使用環境を説明した箇所では、以下のように述べている。

(b) When there is a change of subject (not necessarily within the same sentence) and the subjects are contrasted with one another:

Tú eres listo, pero ella es genial. You're clever but she's a genius.

Mi mujer trabaja y yo me quedo en casa con los niños.

My wife works and I stay at home with the children.

Great confusion is caused by English-speakers who ignore this rule. *Mi hermana es médica y ella nunca está en casa* means ‘my sister’s a doctor and **she** (i.e. someone else) is never at home’, whereas ... *y nunca está en casa* refers to my sister. (Butt and Benjamin 2011 : 132)

すなわち、3人称の実詞句が主語となっている述部の後に、同じ実詞句が主語となる別の述部が後続する場合、主語は明示されないのが原則である。それゆえ、(1)と(4)の例文においても、主格人称代名詞の出現環境は、主語の位置ではなく、前置詞の項の位置でなければならなかったと言えよう。

さて、本節における議論をまとめる。Bello が述べていたように、(1)から(4)の文において主語となっている実詞句(下線部)のような特定のな(specific)実詞句は、確かに主格人称代名詞で置換することができる場合がある。ただし、実詞句の指示対象が無生である場合、主格人称代名詞は前置詞の項でなければ、その指示機能を発揮できない。スペイン語の3人称の主格人称代名詞は、有生の指示対象を指示する傾向が極めて強く、主語として現れる場合、原則として「人」を指す。また、(6)や上の引用で示したように、主格人称代名詞が主語の位置に出現する場合、先行する実詞句との同一指示が得られる保証はなく、逆に、主語について沈黙することによって同一指示が保証される。このことはその指示対象が有生であろうと無生であろうと変わらない。したがって、(1)から(4)までにおける3人称の主格人称代名詞は、主語の位置ではなく前置詞の項として現れる必要があったと断ぜられる。これにより、Bello が主張していたような、定冠詞と3人称の主格人称代名詞を、同じ語種の形容詞的役割を果たす縮約形と実詞的機能を果たす完全形とみなす考えには、スペイン語の統語論上かつ意味論上の事実を無視しているという難点のあることが示された。

## 6. 結論

本稿では Andrés Bello の『カスティーリャ語文法』において、スペイン語の統語論上および意味論上の事実がないがしろにされながら、定冠詞のパラダイムと 3 人称の主格人称代名詞が関連付けられているのを見た上で、これに疑義を呈した。最後に、本稿の主張を繰り返しながら、この『カスティーリャ語文法』と後代の言語学上の成果との関係について簡単に論じ、本稿を締めくくることとする。

本稿を通じて確認したように、Bello が同一の語の異形態であるとみなそうとした、定冠詞と 3 人称の主格人称代名詞は両者共通の語源を持ち、現代においても形態は酷似している上、彼が引用した Destutt de Tracy もフランス語において類似の議論を展開していた。そして、この両者の形態の相似に加え、定冠詞の定性と代名詞の指示機能という意味論的側面をもさらに考慮に入れることができる。ここで還元主義という立場から、定冠詞と 3 人称の主格人称代名詞のパラダイムを結びつけて考えることは、言語における簡潔性 (simplicity) を重視する研究者にとっては魅力的な理論と映ることであろう。実際、Bello 以降のスペイン言語学界において、この考え方に賛同する者は少なくない上、他の言語においても、Bello の影響はないであろうが、同じような結論を導いている研究者がいる<sup>14</sup>。また、Bello のこの『カスティーリャ語文法』が、Noam Chomsky の打ち立てた生成文法を先取していたという指摘もあり<sup>15</sup>、そのためか、定冠詞と主格人称代名詞についての Bello の考えに賛同する者の中には、スペイン語を専門とする生成文法家が多いという印象がある<sup>16</sup>。このように、

<sup>14</sup> 英語における Jespersen (1924) や Postal (1966) などを挙げることができよう。また、Lázaro Carreter (1980) によれば、Jean Dubois もフランス語において同様の結論に至っているという。

<sup>15</sup> Bello の思想の根源をイギリス経験主義哲学であると指摘した Obediente and D'Introno (2001) と、具体的な生成文法家の名 (Henk Haverkate や María Luisa Rivero) を挙げて、彼らが Bello をどのように読んだかについてふれている Cartagena (2014 : 141) の研究を挙げておく。

<sup>16</sup> Bosque (1990) や Leonetti (1999)、Luján (2002) などが挙げられ、スペイン語に限っ

Bello が後の生成文法家を始めとする一部の言語学者に受け入れられるようになったのは、おそらく、少なくとも本稿で我々が論じた定冠詞と主格人称代名詞との関係において、Bello の文法観には後の生成文法との親和性があるという点と、また、上でもふれたように、還元主義者にとって理論上の魅力があるという点に帰せられるであろう。

しかし、その考えがいくら還元主義的立場に利するとはいえ、定冠詞と 3 人称の主格人称代名詞を一つの同じ語の異形態とみなすためには、前節で確認したスペイン語における統語論的事実および意味論的事実を無視しなくてはならなくなる。我々はこの点を重く見る。本稿を通じて検討してきたように、形容詞が実詞化するというのは、総論としてはそのとおりであろうが、その実詞化のプロセスは様々であり、これを下位分類する必要がある。指示形容詞のように形態上になんらの変更も加えずに単独で実詞化できる語種もあれば、他の要素の支えを必要とするものもある。Bello はこの関係を定冠詞と 3 人称の主格人称代名詞との間に見ようとしたわけであるが、スペイン語の 3 人称の主格人称代名詞は、主語の位置においてはほぼ義務的に「人」を指す上、照応の観点から言えば、主格人称代名詞を用いないゼロの形式も考慮に入れる必要があるため、問題が残る。Bello はやはりこの点を見落としてしまっているか、これを捨象し理論的な美を追求したかのどちらかであると言わざるを得ないであろう。我々はこれまで、Andrés Bello のそのような視点と定冠詞の扱い方に疑義を呈したことをここに再確認し、小稿を閉じる。

---

たことではないが、定冠詞と 3 人称の主格人称代名詞を「限定詞 Determiner」というカテゴリーにまとめようとする潮流が見られる。

## 参考文献

- Alarcos Llorach, Emilio (1978) *Estudios de gramática funcional del español*, Gredos, Madrid.
- 朝倉俊一ほか (1996) 『改訂版フランス語ハンドブック』白水社、東京。
- Bello, Andrés (1847) *Gramática de la lengua castellana*, EDAF, Madrid, 1984.
- Bello, Andrés (1847) *Gramática de la lengua castellana destinada al uso de los americanos (Obras completas, Tomo Cuarto, 3ªed., Caracas, La Casa de Bello, 1995)* [http://www.cervantesvirtual.com/servlet/SirveObras/04694925499104944157857/index.htm から取得]
- バンヴェニスト、エミール (河村正夫ほか訳) (1983) 『一般言語学の諸問題』みすず書房、東京。
- Bosque, Ignacio (1990) *Las categorías gramaticales. Relaciones y diferencias*, Editorial Síntesis, Madrid.
- Butt, John and Carmen Benjamin (2011) *A New Reference Grammar of Modern Spanish -5<sup>th</sup> edition-*, Hodder Education, London.
- Cartagena, Nelson (2014) “El aporte de don Andrés Bello a la lingüística y filología modernas”, *Boletín de Filología*, Tomo XLIX/1, pp. 135 – 148.
- [Comte] De Tracy, Destutt (1803) *Éléments d'idéologie*, Seconde partie -Grammaire-, Deuxième édition, Courcier, Paris, 1817 [Réimpression: De Tracy, Destutt, *Éléments d'idéologie*, II -Grammaire-, Vrin, Paris, 1970]
- Gómez Asencio, José J. (2009) “De ‘gramática para americanos’ a ‘gramática de todos’. El caso de Bello (1847)”, *Revista argentina de historiografía lingüística*, I/1, pp. 1 – 18.
- Isaza Calderón, Baltasar (1967) *La doctrina gramatical de Bello 2ªedición*, Anexo 15 de Boletín de la Real Academia Española, Madrid.
- Jespersen, Otto (1924) *The Philosophy of Grammar*, The University of Chicago Press, Chicago [Reprinted 1992].
- Lázaro Carreter, Fernando (1975) “El problema del artículo en español”, *Homenaje a la memoria de don Antonio Rodríguez Moñino*, Castalia, Madrid. (ただし Lázaro Carreter (1980) *Estudios de lingüística*, Crítica, Barcelona, pp.27 – 59, 1ª edición en Biblioteca de bolsillo, 2000 に再録されたものを引用)

- Leonetti, Manuel (1999) *Los determinantes*, Cuadernos de lengua española, Arco Libros, Madrid.
- Luján, Marta (2002) “Determiners as modified pronouns”, *Circle of Linguistics Applied to Communication (CLAC)* 9, 2002.
- 中岡省治 (1996) 『カステイリャ語文法』大阪外国語大学学術研究双書 14.
- Nebrija, Antonio de (1492) *Gramática castellana (Gramática castellana –edición crítica de Pascual Galindo Romeo y Luis Ortiz Muñoz con una introducción, notas y facsímil prólogo de José Ibáñez Martín, Edición Centenario, Madrid, 1946)*
- 西川喬 (1988) 『スペイン語時制研究史 (1492–1870)』研究叢書第 18 冊、神戸市外国語大学外国学研究所。
- Obediente, Enrique and D’Introno, Francesco (2001) “Andrés Bello : Sus antecedentes en la filosofía británica y su proyección en la lingüística moderna”, in Koerner, K.F. K. and Hans-Josef Niederehe (eds.) *History of Linguistics in Spain*, Vol.2, 2001, John Benjamins, Amsterdam, pp. 407–422.
- Postal, Paul M. (1966) “On So-called Pronouns in English”, in F. P. Dineen (ed.) *Report of the Seventeenth Annual Roundtable meeting on Linguistics and Language Studies*, Georgetown University Press, Washington D.C., pp.177–206.
- Real Academia Española (2009) *Nueva Gramática de la Lengua Española*, Espasa, Madrid.
- Robins, Robert Henry (1997) *A Short History of Linguistics 4<sup>th</sup> edition*, Longman, London.
- 寺澤芳雄編 (1999) 『英語語源辞典 (縮刷版)』研究社、東京。
- Urrutia, Hernán (1986) “Conocimiento, lenguaje y gramática en la obra de Andrés Bello (1781–1865)”, in Quilis, Antonio and Hans-Josef Niederehe (eds.) *The History of Linguistics in Spain*, John Benjamins, Amsterdam, pp.263–286.
- 拙稿 (2007) 「アンドレス・ベリョ『カステイリャ語文法』日本語訳(1)」、*IBERIA* 8、pp.31–44、神戸市外国語大学大学院イスパニア語学・文学研究会。
- (2009a) “¿Qué es lo que es el artículo para Nebrija, Valdés y Bello? : apuntes sobre sus modos de pensar” (『ネブリハ、バルデス、ベリョにとって冠詞とは何であるか』)、姫路獨協大学外国語学部紀要 22、pp.161–174、姫路獨協大学。
- (2009b) 「アンドレス・ベリョ『カステイリャ語文法』日本語訳(2)」、*IBERIA*

9、pp.97-117、神戸市外国語大学大学院イスパニア語学・文学研究会。

—— (2010) 「アンドレス・ベリヨ『カスティーリャ語文法』日本語訳(3)」、*IBERIA* 10、pp.142-162、神戸市外国語大学大学院イスパニア語学・文学研究会。

### 引用した文学作品等

Albert Camus, *L'étranger*, Ed. pour le dossier, Gallimard, Paris, 1996, p. 17.